

第2回リレー式授業改善協議会概要

期日：平成26年10月16日（木）

会場：ビーコンプラザレセプションホール

参加：宮崎

1 開会行事：後藤義務教育課長あいさつ

- 昨年度から始まったリレー式授業改善協議会は、学力調査結果を受けて、学校全体で授業改善に取り組むという目的で行っている。今年度の全国学力調査結果については、小学校は九州トップレベルに到達した。中学校についても改善傾向が見られるがまだまだ課題も多い。
- 大分県の国語B問題については、全国平均を超えており、これは学力向上支援教員の方々の単元を貫く言語活動を全国的に広めてきているおかげである。
- 大分スタンダードのブラッシュアップを行い、「新大分スタンダード」ということで、①1時間完結型（「めあて」と「ふりかえり」のある授業）②板書の構造化・板書とノート一体化③習熟の程度に応じたきめ細かい指導の充実④問題解決的な展開の授業（単元あるいは1単位時間）を策定した。今後各学校で具体的に取り組んでもらいたい。

2 講演：「全国学力・学習状況調査結果を踏まえた授業改善」講師 国立教育政策研究所 学力調査官・教育課程調査官 杉本 直美氏

＜全国学力・学習状況調査の意義＞

- 全国学力調査問題を学校現場でぜひうまく利用してほしい。まずは、小・中でお互いの校種の問題をぜひ解いてほしい。
- 児童生徒が明確な目的をもち、考えて表現する授業をたくさん行うことを心がけていかなければならない。
- 質問紙「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしているか」というものがあるが、全国的には年々向上している。
- 国語科で培った力が総合的な学習の時間等の他教科で活用されなければならない。そういう意識をもって、国語科の授業を展開する必要がある。
- 「めあて」「振り返り」を行っているという回答も高い。しかし、課題もある。①教師だけでなく児童生徒も見通しをもたせる必要がある。②何を見通し、何をいつ振り返るのかということが問われている。
- A問題は知識 Bは活用である。A問題は基礎でB問題は応用ではない。どちらも基盤的な事項を意識して作成している。
- まずは、問題を解いていただきたい。これまでも知識・技能を身に付けさせることは行われている。そして、その知識・技能を活用した授業を展開してきたはずである。それを今後はより一層意図的に拡充していこうということである。
- B問題における記述式の問題を活用させていただきたい。自分の考えを書かせて、思考力・判断力・表現力を評価するために行う。採点もマルバツではなく、解答類型を見ていくことが重要で、正答率70未満について課題があると判断している。また、10%を超えた解答類型については、課題があると判断している。
- 誤答を詳しく分析することが、次の授業のスタートとなる。特に「4年間のまとめ」を活用していただきたい。

＜全国学力調査問題と授業アイデア例について＞

- 小学校国語における課題は、立場や根拠を明確にして話し合うことについて、発言をする際に一定の立場に立ってはいらるが、根拠を明確にした上で発言する点に、依然として課題がある。
- 中学校国語における課題は、自分の考えを表す際に、根拠を示すことは、意識されているが、根拠として取り上げる内容を正しく理解した上で、活用する点に課題がある。
- 小学校国語の「卒業文集を話し合う。」問題を例に授業改善を進める。こうした課題のある問題を解く授業を行うために、授業アイデア例を示している。中学校国語A問題の「卒業文集の題名の候補について話し合う。」問題を出した。話し合うことに課題が見られるので、複数の案から一つに絞り込む話し合いを行う際のポイントを踏まえる必要がある。
- どのような授業が求められるかと言えば、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討する授業ではないか。具体的には以下のようにする。①目的を確認し、多様な意見を出し合う。②図表等を使って、出された意見を観点を決めて思考ツールを活用して整理する。③結論に至った過程を説明する。
- 「ことわざ」「慣用句」の問題も毎年出題しているが、課題が見られる。
- 求められる授業は、「多様な語句の意味を理解し、適切に使う授業」である。具体的には以下のようにする。①言葉を集める目的を確認する。②集めたい言葉を様々な辞書や本などから探す。③探した言葉を整理し、互いに読み合う。
- 中学校国語B問題の1で、読書についての標語を考える問題がある。「（ ）法を使って、情景を豊かに想像できるようにしている。」倒置法や擬人法などの語句が、具体的な表現と結び付けて考えさせている授業になっているか。
- 技法等に付いては、取り立てて知識として教えるだけでなく、単元の一連の流れの中で、具体的な表現と結び付けて指導していかなければならない。
- 求められる授業は、「表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめる授業」である。具体的には以下のようにする。①標語を分担し、表現の工夫とその効果について分析する。②分析した内容について説明し合う。③分析を生かして標語を作る。表現技法の種類やその効果について理解させ、自覚的に使わせる。

- 3 講義：「国語科の指導に生かす評価について」 講師 国立教育政策研究所 学力調査官・教育課程調査官 杉本 直美氏
- ポップを作る言語活動がよく見られるが、具体的な言語活動と評価規準がズレている場合があるので、具体的な姿をイメージして、評価を進める必要がある。
 - 指導と評価の計画の立案の手順
 - ①付けたい力（指導事項）の明確化 ②効果的な言語活動の設定
 - ③単元の構想（学習過程の明確化） ④評価規準の設定（おおよそ満足できる姿をBとする）
 - 学習評価は、子どもに力を付けるためのものであり、ランク付けするものではない。自分の授業を検証するためのもの。
 - 評価規準を設定したら、まずCの子どもたちに素早く手当をしなければならない。なぜなら、C以外の子どもたちは暫定的にBと評価できる。最初にBではなく、Aのラインを決めてしまうと、Bのラインが下がる。
 - 国立教育政策研究所の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料を参考にしてもらいたい。
 - 教材名がそのまま単元になっていることがある。子どもがこれからこんな言語活動を行なっていくことがわかるような単元名が望ましい。
 - 領域は1つ～2つぐらいがよい。3つは多すぎる。時数も少ないのであるから、1つか2つに絞る。また、年間指導計画と評価の体系化・重点化のために、評価のマトリックスをしていくことが大切である。その中で評価項目を絞っていくことが大切で、しっかり評価するものは二重丸にすることなどで、落ちのないようにしておく。

4 実践発表：「国語科の授業改善」

(1) 国東市立国東小学校 教諭 安部詠子氏

- 国語科の学力に課題があり、話す・聞く、読む、書くこと全般に渡って課題があった。
- 国語科の授業改善に取り組み、読書活動と関連付けた単元を貫く言語活動を位置付け、目的をもって主体的に学ぶようにしていった。
- 言語環境を整えるということで、図書室や言語活動の交流の場といったスペースを作った。
- 第2次が長くなったり、第3次との関連が無いなどが今後の課題である。

(2) 佐伯市立鶴岡小学校 指導教諭 武田文子氏

- 平成24年度から3名の学力向上支援教員と佐伯市教育委員会と佐伯教育事務所とで連携しながら、佐伯市全域に単元を貫く言語活動を位置付けた国語科の授業づくりを広げる。今年度は4名に増え、公開授業プラス協議の時間を増やした。
- 若い先生や自校では、伝えたり、教えたり、資料を渡したり、一緒に考えている。
- 1年間の実践事例を紹介して、どのような単元を貫く言語活動を位置付けたかということを紹介。学校図書館支援員との連携が効果的であった。
- 鶴岡小の質問紙調査結果では、国語の勉強が好きという子どもたちが8割近くになった。

(3) 中津市立中津中学校 教諭 甲斐瑞穂氏

- 聞いているフリが得意な受け身の子どもたちをどうにかしなければならなかったと考えた。
- 思考力・判断力・表現力を育むため、言語活動を充実させた授業に改善しなければならなかったと考えた。
- 読むことの実践事例「リライト（書き換え）に挑戦しよう～視点を替えて読んでみよう～」教科書教材（河鹿は見た「少年と父のえびフライ物語」）
- 書くことの実践事例「私はこう考える」～新聞投稿にチャレンジ～
- 中津市の国語部会では、各学年で単元を貫く言語活動の授業を提案。

5 説明：「学力調査結果を受けて、組織的に取り組む授業改善」大分県教育庁義務教育課 大渡指導主事

- 国語科における課題と授業改善のチェックポイントを説明。
 - ①単元を貫く言語活動を設定した課題解決的な展開の授業づくり
 - ②多様な図書資料等を主体的に活用する授業の推進
 - ③「めあて」の設定や指導に生かすことができる「より具体的な評価規準」の設定
- これだけは、学校全体で実施することを3つ。
 - ①「単元の学習計画の掲示」 ②「学習の成果物の共有」 ③「評価に焦点を絞った授業研究を」